伯爵令嬢と薔薇の蕾

杏珠唏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伯爵令嬢と薔薇の蕾

【Ｎコード】
Ｎ４６８５Ｔ

【作者名】
杏珠唏

【あらすじ】
エリザベス・メアリー・バルトシュバイクは貴族とは名ばかりの貧乏伯爵家の娘。
毎日贅沢とは言えない暮らしをしながらも平々凡々に過ごす日々。
そんな彼女にも王国騎士団に長年の想い人がいる。
一途な彼女の想いはいつになったら仕事バカの彼に届くのか？
ほのぼのラブストーリーです。

多分そんなに長くならない予定。基本的に気まぐれ更新です。

貴方を思う夜

エリザベス・メアリー・ヴァルトシュバイクは貴族とは名ばかりの貧乏伯爵家の一人娘。そんな彼女には想い人がいる。

王国騎士団二番隊隊長でありトリニアス侯爵家時期当主レイヴン・トリニアス。
容姿端麗だが硬派で浮わついた噂ひとつない仕事一筋の男だ。

エリザベスはレイヴンとは幼なじみのような関係だが最近はレイヴンが仕事ばかりしているために月に二度あるお城の舞踏会でちらりと警備しているのを見るだけだ。
次の舞踏会まではあと１０日ほどある。
お城の敷地内にある王都図書館に行くついでに会えれば…と期待して行っても会えたことなど一度もない。

「レイヴンに逢いたい…」
溜め息と共に出た想いも夜風に掻き消されなんとも儚い。

「リザ、夜風は身体に毒ですわ。それにもう遅い時間です。そろそろお休みになられては？」

静かに現れた女にしては長身の女性はエリザベスの侍女アイレン。
優秀な侍女であり彼女の親友でもある。ゆえに二人きりのときは口調も形式的なものではなくなる。ちなみにリザとはエリザベスの愛

称だ。

「アイレン、明日お城の庭園に行かない？きっとアイリスの花が見頃よ」

「リザ…アイリスはまだまだ先の季節よ。レイヴン様だったら庭園にいるくらいなら鍛練なさっていると思うわ」

アイレンの言葉を聞くとエリザベスはあからさまに大きな溜め息を吐くと再び夜空を眺めた。

わかっていても少しの可能性に賭けてみたくなるのが恋する乙女なのだろうか。

エリザベスよりも年上だが恋をしたことのないアイレンは首を傾げながら部屋を後にした。

彼の日常

宮廷という華やかな所にあるこの場所はいつもむさ苦しい。
室内は熱気でムンムンしている。
部下の稽古をつけているときにふと周りを見渡せば当たり前だがここには男しかいない。
仕事もこの場所も嫌いではない。むしろ好きでやっている。
しかしこう毎日むさ苦しい場所にいるとたまには癒しがほしくなる。

隊長になって1年ほど経つが、ここ数ヶ月は仕事ばかりしていてまともに屋敷にも帰っていない。
以前なら月1ペースで屋敷に帰る度に美味しいお茶とお菓子を用意して自分を待っていてくれた幼なじみの少女とも長く会っていない。

親同士の仲が良く、家も近所だったため物心ついたころからいつも一緒にいた彼女は元々美少女だったが最近少女のような幼さが抜け、急に色っぽく美しくなっているらしい。

彼の日常　2

昼を過ぎ、春とはいえ陽射しは強い。
休憩も兼ねた昼食の時間を設けたレイヴンは適当な木陰を見つけると腰を下ろして一息ついた。
雲ひとつない清々しいほどに青い空を見上げるとずっと昔から自分の心を捕まえて離さない憎らしくも愛しい幼馴染みが頭に浮かんだ。
彼女はこんな青空が大好きで、晴れた日には2人で屋敷を抜け出し森や湖へ遊びに行った。
陽に照らされてキラキラと輝く湖を見て瞳を輝かせた彼女の方が眩しかった。

『また行こうね』

そう約束した時から何年経っただろうか。
何も知らなかったあの頃はこのままずっと一緒なのだと信じて疑わなかった。
しかし2人は成長し、大人になった。
いずれは互いに結婚し家庭を持つことになるのはわかっている。
実際、この1、2年は父から何度もその類いの話をされた。
今までは仕事が忙しいという理由で断ることが出来たが、そろそろその手も使えなくなってきそうだ。
いっそ男らしく彼女に求婚して結婚相手として父に紹介出来れば良いのだが、所詮自他共に認めるヘタレである。
何度決心して実行しようとしたことか。
初めは昔から自分の気持ちを知っていた両親は応援してくれていた。
だがあまりのヘタレっぷりに呆れた両親はもう彼女じゃなくてもいいから婚約者くらい連れてこいと言って頻繁に縁談を持ってくるようになったのだ。

紺碧とドレスと彼女（前書き）

今更ですが初めまして。
拙い文章で読みにくく、おかしい所もあるかも知れませんがどうか
最後までお付き合い下さい。

紺碧とドレスと彼女

毎度の事ながらエリザベスは悩んでいた。
この前は淡い水色にレースを使いシンプルだが可憐な印象のものだった。
次は思い切って真紅の生地に胸元が空いたものを着てみようか。
いや、それは思い切り過ぎだろうか。

などと心の中で独り言を言いながら選んでいたのは次の舞踏会で着るドレスだ。
しかし忘れてはいけない。
彼女の家は貴族とはいえ決して裕福ではないのだ。
ドレスを選ぶにしても予算を考えるといつも周りの令嬢達より遥かにシンプルなものになる。
型はあまり派手に出来ないがゆえ色にはとことんこだわる。

しかしいつまで経ってもなかなか決まらない。
女性なら着るものにこだわって長時間悩むのは当然のことだろうが、彼女は選び始めてかれこれ3時間以上が経つ。
そんなエリザベスの様子を見てとうとう痺れを切らしたアイレンが更に何着かドレスの見本を抱えてやって来た。

「いい加減だいたいの形は決めたわよね？別に今度の舞踏会が特別ということはないんだから無難なものを選んだらどう？」
ため息まじりでそうこぼすアイレンに視線を移したエリザベスはアイレンが持っているドレスの一着に目がとまった。

海の底のような紺碧から上に向かって淡い色になっていくドレス。

深い青は何を隠そうレイヴンの瞳の色なのだ。
エリザベスが彼に関するものが嫌いな筈がない。

「アイレン、その青いドレスよく見せてくれないかしら。凄く素敵なドレスだわ」

アイレンが広げたドレスをエリザベスに宛がい、鏡にその姿を映して見ると、なるほど、よく似合う。

無駄な飾りは一切ない流れるようなマーメイドドレスは小柄ながらスレンダーかつ胸もある色っぽい体型のエリザベスに驚くほど似合っていた。

「よく似合ってるわリザ。このドレスを着るなら庭の青薔薇を髪に挿したらどうかしら？素敵だと思うわ」

エリザベスも頷いて微笑んだ。

「えぇ。このドレスに決めたわ。形も素敵だけど、これはレイヴンの瞳の色だもの」

そう言ってエリザベスは彼を想いながらドレスに合う装飾品を選び始めた。

彼女の杞憂（前書き）

大分遅くなりました。
長期休みに入ったので時間がある時にぼちぼち更新したいと思います。

彼女の杞憂

舞踏会の準備も終わり、自室で読書をしていたエリザベスの元へ３つ下の弟アゼルレッドが訪ねてきた。
彼は今年騎士団に入団したばかりの新人のため、鍛練の後暇だといってしょっちゅう屋敷に帰ってくる。
それはいいのだが、いつも両親に挨拶もなしに真っ先にエリザベスの部屋へとやってくるのだ。
若干シスコン気味の１６歳である。
アイレンが彼の好きなケーキやお菓子の乗ったカートを引いて部屋に入ってくると彼は目を輝かせてそれらに手を伸ばした。
その様子を見てエリザベスは柔らかく微笑んだ。
「アゼルは相変わらずね。甘いものを見るといつも子供のように無邪気になるんだから」

「しょうがないだろう？俺は甘いものには目がないんだ。特にトニーが作ったものは絶品だからな」
そう言って屋敷の料理長自慢のケーキを頬張りながらニコニコしている弟を見るエリザベスの目は優しく慈愛に満ちている。

「姉上、そういえば噂で聞いたけどレイ兄が今度の舞踏会に侯爵家の跡取りとして出席するらしい。しかもそこで婚約者候補を見つけろって親父さんに言われたってさ。姉上、ピンチじゃねーの？」
その言葉を聞いたエリザベスは文字通り固まってしまい、アゼルが話しかけても揺らしても反応しなかった。

冷静になって考えてみれば、彼も自分と同い年の１９歳だ。自分の所にも縁談の話が来ていると言うことは侯爵家の跡取りである彼の元にそういう類いの話が来ていない訳がないのだ。

「…アゼル、彼には地位も名誉もある。私より当然相応しい方がいるし、そもそも好きになること自体いけなかったのよ」

静かに言うとアゼルは呆れた顔をした。

「姉上が鈍感なことは知っていたけど、こんな意気地無しだとは思わなかった。好きなら好きで良いじゃないか。恋に身分とか地位なんて関係ないって俺に言ったのは何処のどいつだよ。自分は気持ちも伝えずにいるくせに」

アゼルが去った後の部屋はひどく静かでいつもの和やかな雰囲気はなく、この部屋の主が沈んでいて暗い為か常に凛としている優秀な侍女の顔も何処と無く元気がないようだった。

夕食もこの日は部屋で摂り、湯浴みを済ませて早々に就寝の準備を済ませたエリザベスはベッドに入ったものの、眠ることが出来ずに寝返りを繰り返していた。

アゼルの言うことは的を射ていた。

１年前、弟も身分違いの恋をした。

相手は弟より１つ年下の公爵令嬢であり、社交界デビューしたばかりだが美しいと評判がある方だった。

王城の舞踏会で出会った2人はあっという間に恋に落ち、両家の親の猛反対を受けたが、根気強く粘った結果公爵家の方が先に折れた。
その為格下である伯爵家が反対することは出来なくなった。
それから暫くして2人の婚約が公になったことは、まだ記憶に新しい。

エリザベスは10年以上彼を想い続けているのに一度も気持ちを伝えた事がない。
幼馴染みで仲が良いと言ってもやはり貴族としての身分は違うのだ。
彼の家は伝統のある有名な侯爵家。
対してエリザベスの家は貴族と言えど金銭的に余裕のない貧乏伯爵家。
釣り合う筈もない。

…実際は彼女の父の頑張りで少しずつ金銭的な余裕が出来始めたのだがそんなことを知らないエリザベスは未だにこんな事を気にしているのである。

彼の焦りと彼女の危機１

その日珍しく上司の執務室に呼ばれた。
その部屋に呼び出される時は大抵軍の中での機密事項のための会議がある時や何か問題を起こした時だけだ。
だが最近は国内も平和で大きな事は起こっていないし、自分はもちろん所属する隊でも何か問題を起こしたということはない。
一体何事だろうかと、些か緊張気味にドアをノックし許可を得て部屋に入ると、予想外の人物と目が合った。

「ロドリー隊長、どういうことです？何故父が此処に？」
咄嗟に出た声は自分でも少し低音だったと思う。

「可愛い息子に会いに来てはいけないのか？相変わらずつれない奴だ」
「親父…気持ち悪いからやめてくれ。それより何の用だ」
いい歳した息子に可愛いはないだろう、と思わず悪態をついて再度問う。

「レイヴン、お父上はお前に舞踏会に出てほしいそうだ。仕事のことならその日は休暇にしておいた。久々だろうから楽しんでこい」
「隊長！？俺はまだ行くとは言ってないのですが…」
「お前のお父上は俺の昔の上司で侯爵様だ。断れるわけがないだろう」
まさかの決定事項に親父を睨み付けると暢気に鼻歌なんぞ歌ってやがった。

そんなわけで今回の舞踏会に参加したわけだが、わざと娘同伴の貴族にばかりやたらと話し掛ける親父を見ると、どうやら早々に婚約者を選べという魂胆が丸分かりでうんざりする。
一通り挨拶回りが終わった所で人気の少ないバルコニーへ避難した。
久しぶりに仕事で警備をするのではなく侯爵家の跡取りとして参加した舞踏会は予想していた通りあまり楽しいものではなかった

父の付き添いで貴族達に挨拶回りをすれば年頃の娘のいる貴族はここぞとばかりに縁談の話を持ち掛ける。
もちろんエリザベス以外の女など興味の欠片もないので今のところサラリと交わしてはいるが。

そんなことよりエリザベスだ。
俺は父に言われたためでもあるが彼女に会うために此処に来たのだ。
いつもならすぐに見つけられる金茶の幼馴染みは今日に限ってなかなか見つからない。
まさか今日は来ていないのか？
それは困る。
仕事まで休んで来たというのに。警備をしている同僚と目が合うと何となく苦笑いしてしまう。
この日のために父がいつの間にか用意していた無駄に質の良すぎる濃紺の衣装。
いつもの黒の隊服が恋しい。

バルコニーで夜風に吹かれながらグラスを傾けていると後ろから聞

き慣れた低い声が自分の名を呼んだ。
振り返ると幼い頃からの親友が琥珀色の液体の入ったグラス片手にやって来ていた。

「久しぶり…でもないな。お前が隊服じゃないってことは参加してんのか。珍しい」

「親父から言われて来てるだけだ。自分から参加しようなんておもわない」
そう言うとアルフレドは苦笑して頷いた。

「だろうな。ところで今日はエリザベス嬢と一緒じゃないのか？」

「探してたけどいないんだ。今日あいつを見たか？」

俺の問いにアルフレドはニヤリと笑って挑発するように言った。

「エリザベス嬢ならさっき着いた途端にモリス伯爵家のやつに捕まってたから助けてやったけど？
お前が本気出さないならいい加減俺が奪うぞ」

一瞬青ざめたのが自分でもわかった。
コイツならやりかねない。
涼しい顔をして気に入ったものがあれば貪欲に求める男であることは俺が一番知っているからだ。
忘れていたがエリザベスは何気にコイツのタイプだ。しかし俺の気持ちを知っていて本気で彼女に手を出すような奴ではない、と信じたい。

とにかくまた変な男に捕まらない内に彼女を見つけなければ。
焦る気持ちを抑え、談笑する人々の脇をすり抜けながら彼女を探しに歩を進めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4685t/

伯爵令嬢と薔薇の蕾

2011年8月6日14時56分発行